

シミュレーション教材を用いた
人間関係のトラブルを目撃した
場合の行動選択に関する教育実践

大阪府 関西学院千里国際中等部・高等部
米田謙三[†]

E-mail: [†] kenzoo@cd5.so-net.ne.jp

研究背景：高校生のインターネット使用

• 高校生 インターネット使用率増加

スマートフォン、タブレット、ノートパソコンなどのいずれかの機器でインターネットを利用している割合

(内閣府 「青少年のインターネット利用環境実態調査」 2019年)

平成29年 98.6 % 平成28年 98.2 %

参考 10歳から17歳の割合

平成29年 92.3 % 平成28年 91.4 %

高校生のインターネット上の コミュニケーション

- 高校生 インターネット上
コミュニケーション増加
- 特に「SNS」の利用率が高い。
- 高校生730名のうち87.5%が
LINE を利用
(リクルート進学総研が実施した
「高校生価値意識調査 2014」)

従来の授業や教材の課題

- ネット問題の授業や教材について
 - 教材は、多数あるが個別体験型が少ない
 - 教材を解説するマニュアルなどが少ない
 - 自分の考えを議論、共有することが少ない

従来の授業や実践の課題に対する 取り組み-1

ネットいじめを含むネットトラブルの予防に向けて 下記を実施

- 「加害行動を目撃した人の 行動選択と
その結果」動画シミュレーション教材作成
- 「自分がどのような行動を選択できるのか」を
考えたり, 議論したりする授業を実施

(松本宗久, 鈴木佳苗, 中園長新, 安田つくし「人間関係のトラブルを目撃した場合の行動 選択に関する教育実践と評価(1):レスポンス・システムを用いたプログラムの検討」日本教育 情報学会 年会論文集31. pp. 284-285, 2015 年)

シミュレーション教材を用いた授業に 期待される効果

- 人間関係のトラブルを目撃した場合に**早期の対応が重要であることや、さまざまな行動の選択肢があることを理解する**

従来の授業や実践の課題に対する 取り組み-2

シミュレーション教材の体験後に
グループ・ワークを取り入れる

グループ・ワークに期待される効果-1

シミュレーション教材の体験後に
グループ・ワークを取り入れる

自分が選択した行動以外の選択肢や
その行動を選択した場合の状況の変化など
について考える

グループ・ワークに期待される効果-2

自分ひとりでの行動以外に、
数名のグループやクラス全体での行動の選択肢

ネットいじめへの対応において、
観衆や傍観者の適切な判断力を育成させ、
ネットいじめを抑止する意識を向上させる

研究目的

- 生徒が人間関係のトラブルを目撃した場合に
早期の対応が重要であることや、
さまざまな行動の選択肢があることを理解する
ためのシミュレーション教材を
用いた実践とその評価を行う

研究目的

- 事態を悪化させない行動の選択肢や
自分が選択可能な行動の選択肢について考え、
グループ・ワークを通して
自分ひとりだけではなく、
数名のグループやクラス全体で
選択可能な行動について考える
実践とその評価を行う

方法：対象者

- A私立高校1年生1クラス22名を対象

使用教材

シミュレーション型教材

- プレーヤーが行動選択をしながら進める部分と対人トラブルを目撃した場合の行動選択やネット 安全利用に関する解説部分から構成
- 主人公の女子高生が同級生(加害側の生徒)から彼女の仲良しグループのメンバー(被害側の生徒)に対する不満を聞くところから始まる。プレーヤーは、登場人物の会話を読みながら主人公の行動(仲裁、傍観など)を選択してストーリーを進めていく
- 早期に適切に行動すると事態の悪化を防ぐことができるが、行動のタイミングが遅れたり不適切な行動をとった場合には事態が悪化する

授業構成

50 分の授業

(1) 「導入」はスライド資料

クラスでの対人トラブルに対する「当事者意識」の重要性、学校での対人トラブルとネット上の対人トラブルとの関係、ネット上ではトラブルが広く悪化することの説明(5分)

授業構成

50 分の授業

(2) 「展開」

シミュレーション型教材を実際に体験(20分)

早く終わった生徒は違うパターンを、

時間がかかった生徒は後程実施するように指示

授業構成

50 分の授業

(3) シミュレーション型教材の体験後、グループ(2, 3名)で自分ひとり、数名のグループ、クラスがとることができる行動とその結果について話し合い、その結果をワークシートに記入(15分)

グループ分けは、座っている前後左右で適宜作るように指示

授業構成

50 分の授業

(4)公開されているスライド資料を用いて、
授業のまとめ(5分)

(5)授業の評価や授業に対する感想を記述する
用紙を配布し、記入(5分)

実施環境

- 授業前の準備
事前に教材をダウンロードしたノート PC
直接 URL に授業時にアクセスの2つの方法
- 授業に使用した教室は 普通教室でWifi環境。
また、音声について、シミュレーション教材の
音声が他の人に聞こえないように各自で用意したイヤホンを利用した

行動選択に関する授業評価

- 今回の授業が、今後対人トラブルと目撃した際の行動選択に参考になるか

5段階

(「1:参考になった」～「5:参考にならなかった」)

結果・考察:グループ・ワークの記述の分析-1

- 2～3名のグループで話し合ったためか、**数名のグループでとることができる行動**に関する記述が、自分ひとりやクラス全体でとることができる行動に関する記述よりも多かった
- 数名のグループでできる行動として、**被害者を仲間に誘うという回答**が複数のグループで見られた

グループ・ワークの記述の分析-2

- 状況がひどくなっていったら先生などの他の人に相談するという回答
 - 早期対応の選択肢としては 大人への相談以外の行動を考えていることなども示唆された
- 生徒が人間関係のトラブルを目撃した場合に 早期の対応が重要であることを理解

グループ・ワークの記述の分析-3

- クラス全体でできる行動としては「話し合い」という回答

生徒の感想-1

・個人や人間関係のトラブル・いじめの状況によって目撃者がとることができる行動は異なることを実感した

→生徒が人間関係のトラブルを目撃した場合にさまざまな行動の選択肢があることを理解

生徒の感想-2

- 違法行為を目撃した場合は、やはり全てを自分で対応することが難しいので大人に相談すべきだと思った
- 法律はいじめにも適用され得るということしかも中高生も対象となり得ることを学んだことは驚き

行動選択に関する授業評価

- 今回の授業が、今後対人トラブルと目撃した際の行動選択に参考になるかを尋ねた結果、
約7割の生徒が参考になると回答

→今後の課題:教材の内容について

今後の課題：教材の内容について

今回の教材は、**女子の人間関係のトラブル**を目撃した場合の行動選択になっている

シミュレーション教材の体験後

他の人間関係のトラブルなどの例も取り入れていくことを検討する必要がある

今後の課題：グループ・ワークの導入についての詳細な検討など

- 個人ワークとグループ・ワークの比較
- シミュレーション教材とグループ・ワークを組み合わせた授業のバリエーションと授業評価

参考文献

- 1) 松本宗久, 鈴木佳苗, 中園長新, 安田つくし「人間関係のトラブルを目撃した場合の行動 選択に関する教育実践と評価(1):レスポンス・システムを用いたプログラムの検討」日本教育 情報学会 年会論文集31. pp. 284-285, 2015年
- 2) 中園長新, 鈴木佳苗, 安田つくし, 松本宗久「人間関係のトラブルを目撃した場合の行動 選択に関する教育実践と評価(2):レスポンス・システムを用いた短縮版プログラムの検討」日本教育情報学会 年会論文集31. pp.286-287, 2015年
- 3) Crick, B. R., Dodge, K. A. A review and reformulation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment. Psychological Bulletin. 1994, Vol.115, p.74-101.
- 4) Dodge, K. A. "A social information processing model of social competence in children". Cognitive Perspectives on Children's Social and Behavioral Development. Perlmutter, M., 1986, p. 77-125, (The Minnesota Symposia on Child Psychology, Vol.18).
- 5) 久保田裕, 小椋さとみ. 人生を棒に振る スマホ・ネットトラブル. 双葉社. 2014, 192p.
- 6) リクルート進学総研. "高校生のスマートフォン所有率 82.2% 3年間で5.5倍に約6割がスマホで勉強＝「スマホ勉強」を実施ー「高校生価値意識調査 2014」よりー". 2014-05-23,
http://souken.shingakunet.com/research/2014_smartphonesns.pdf, (参照 2016-07-11).
- 7) 子どもたち自身による, ネット・スマホ問題対策の可能性と評価について : 関西スマートフォン・サミット(自主企画シンポジウム)
- 8) 竹内 和雄, 戸田 有一, 太田 はるよ, 若畑 将彦, 柳田 竜一, 本田 英理, 宮田 里枝, 柚木 さおり 日本教育心理学会総会発表論文集 [巻号一覧] 日本教育心理学会総会発表論文集 (56), 122-123, 2014-10-26
- 9) 学校はスマホにどう対応すべきか : 兵庫県の条例改正から考える (特集 スマホ時代の子どもたち) -- (スマホに損なわれない子どもを育てる) 竹内 和雄
児童心理 70(11), 876-880, 2016-07